

(2) 「シンナー遊び」と大麻乱用との関係

「シンナー遊び」の経験と大麻乱用の経験との関係を表54に示した。

結果には男女ともに有意差 (p<0.01) が認められ、「シンナー遊び」未経験者では、男子で0.3%、女子で0.1%の者が大麻乱用の経験があると答えた

のに対して、経験者群では、男子で24.2%、女子で25.5%の者が大麻乱用の経験があると答えた。

この両群による違いは、1996年調査、1998調査、2000年調査の結果と同じ傾向であり、中学生における「シンナー遊び」と大麻乱用との関係が強く示唆された。

表53 大麻乱用の生涯経験率

		1年		2年		3年		全体	
男性	大麻経験なし	10555	(98.6)	10301	(98.2)	10912	(98.3)	31768	(98.3)
	大麻経験あり	43	(.4)	79	(.8)	74	(.7)	196	(.6)
	無回答	109	(1.0)	112	(1.1)	117	(1.1)	338	(1.0)
	合計	10707	(100.0)	10492	(100.0)	11103	(100.0)	32302	(100.0)
($\chi^2 = 11.867$, $df = 2$, $p = .000$)									
女性	大麻経験なし	9802	(98.9)	9927	(98.9)	10389	(98.8)	30118	(98.9)
	大麻経験あり	29	(.3)	55	(.5)	40	(.4)	124	(.4)
	無回答	79	(.8)	57	(.6)	84	(.8)	220	(.7)
	合計	9910	(100.0)	10039	(100.0)	10513	(100.0)	30462	(100.0)
($\chi^2 = 8.223$, $df = 2$, $p = .000$)									
全体	大麻経験なし	20367	(98.7)	20240	(98.5)	21323	(98.5)	61930	(98.6)
	大麻経験あり	75	(.4)	135	(.7)	115	(.5)	325	(.5)
	無回答	188	(.9)	169	(.8)	201	(.9)	558	(.9)
	合計	20630	(100.0)	20544	(100.0)	21639	(100.0)	62813	(100.0)
($\chi^2 = 17.309$, $df = 2$, $p = .000$)									

表54 「シンナー遊び」経験と大麻乱用経験

		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	大麻経験なし	31232	(98.8)	332	(73.8)	204	(80.3)	31768	(98.3)
	大麻経験あり	82	(.3)	109	(24.2)	5	(2.0)	196	(.6)
	無回答	284	(.9)	9	(2.0)	45	(17.7)	338	(1.0)
	合計	31598	(100.0)	450	(100.0)	254	(100.0)	32302	(100.0)
($\chi^2 = 4349.989$, $df = 1$, $p = .000$)									
女性	大麻経験なし	29771	(99.2)	231	(73.6)	116	(80.0)	30118	(98.9)
	大麻経験あり	40	(.1)	80	(25.5)	4	(2.8)	124	(.4)
	無回答	192	(.6)	3	(1.0)	25	(17.2)	220	(.7)
	合計	30003	(100.0)	314	(100.0)	145	(100.0)	30462	(100.0)
($\chi^2 = 5079.324$, $df = 1$, $p = .000$)									
全体	大麻経験なし	61044	(99.0)	565	(73.3)	321	(80.3)	61930	(98.6)
	大麻経験あり	122	(.2)	194	(25.2)	9	(2.3)	325	(.5)
	無回答	476	(.8)	12	(1.6)	70	(17.5)	558	(.9)
	合計	61642	(100.0)	771	(100.0)	400	(100.0)	62813	(100.0)
($\chi^2 = 9497.338$, $df = 1$, $p = .000$)									

表55 大麻を吸うことをどう思いますか？

		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	吸うべきではない	30187	(95.5)	307	(68.2)	211	(83.1)	30705	(95.1)
	麻薬・覚せい剤と違って 少々なら構わない	528	(1.7)	48	(10.7)	13	(5.1)	589	(1.8)
	全く構わない	594	(1.9)	84	(18.7)	8	(3.1)	686	(2.1)
	無回答	289	(.9)	11	(2.4)	22	(8.7)	322	(1.0)
	合計	31598	(100.0)	450	(100.0)	254	(100.0)	32302	(100.0)
	($\chi^2 = 838.011$, $df = 2$, $p = .000$)								
女性	吸うべきではない	28924	(96.4)	191	(60.8)	125	(86.2)	29240	(96.0)
	麻薬・覚せい剤と違って 少々なら構わない	529	(1.8)	43	(13.7)	4	(2.8)	576	(1.9)
	全く構わない	320	(1.1)	70	(22.3)	4	(2.8)	394	(1.3)
	無回答	230	(.8)	10	(3.2)	12	(8.3)	252	(.8)
	合計	30003	(100.0)	314	(100.0)	145	(100.0)	30462	(100.0)
	($\chi^2 = 1396.966$, $df = 2$, $p = .000$)								
全体	吸うべきではない	59144	(95.9)	501	(65.0)	337	(84.3)	59982	(95.5)
	麻薬・覚せい剤と違って 少々なら構わない	1061	(1.7)	91	(11.8)	17	(4.3)	1169	(1.9)
	全く構わない	917	(1.5)	158	(20.5)	12	(3.0)	1087	(1.7)
	無回答	520	(.8)	21	(2.7)	34	(8.5)	575	(.9)
	合計	61642	(100.0)	771	(100.0)	400	(100.0)	62813	(100.0)
	($\chi^2 = 2131.765$, $df = 2$, $p = .000$)								

表56 大麻を吸うと精神病状態や無動機症候群になることがあるのを知っていますか？

		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	知っている	16575	(52.5)	240	(53.3)	112	(44.1)	16927	(52.4)
	知らない	14343	(45.4)	188	(41.8)	114	(44.9)	14645	(45.3)
	無回答	680	(2.2)	22	(4.9)	28	(11.0)	730	(2.3)
	合計	31598	(100.0)	450	(100.0)	254	(100.0)	32302	(100.0)
($\chi^2 = 1.032$, $df = 1$, $p = .310$)									
女性	知っている	16946	(56.5)	179	(57.0)	64	(44.1)	17189	(56.4)
	知らない	12679	(42.3)	119	(37.9)	70	(48.3)	12868	(42.2)
	無回答	378	(1.3)	16	(5.1)	11	(7.6)	405	(1.3)
	合計	30003	(100.0)	314	(100.0)	145	(100.0)	30462	(100.0)
($\chi^2 = .990$, $df = 1$, $p = .320$)									
全体	知っている	33544	(54.4)	423	(54.9)	176	(44.0)	34143	(54.4)
	知らない	27038	(43.9)	309	(40.1)	185	(46.3)	27532	(43.8)
	無回答	1060	(1.7)	39	(5.1)	39	(9.8)	1138	(1.8)
	合計	61642	(100.0)	771	(100.0)	400	(100.0)	62813	(100.0)
($\chi^2 = 1.710$, $df = 1$, $p = .191$)									

(3)大麻吸引に対する意識について

「大麻を吸うことをどう思いますか？」との問いに対する回答の分布を表55に示した。

回答の分布には、男女共に有意差 ($p < 0.01$) が認められた。「シンナー遊び」未経験者群では、男女共に96%の者が「吸うべきではないと思う」

を選んだのに対して、「シンナー遊び」経験者群では、それを選んだ者は、男子で68%、女子で61%であり、19~20%の者が「まったくかまわないと」で25.5%の者が大麻乱用の経験があると答えた。

この両群による違いは、過去3回の調査結果と同じであり、中学生における有機溶剤乱用と大麻乱用との関係を強く示唆するものである。

表57 覚せい剤の乱用経験（生涯経験率）

		1年		2年		3年		全体	
男性	覚せい剤経験なし	10547	(98.5)	10324	(98.4)	10932	(98.5)	31803	(98.5)
	覚せい剤経験あり	40	(.4)	62	(.6)	57	(.5)	159	(.5)
	無回答	120	(1.1)	106	(1.0)	114	(1.0)	340	(1.1)
	合計	10707	(100.0)	10492	(100.0)	11103	(100.0)	32302	(100.0)
($\chi^2 = 5.239, df = 2, p = .000$)									
女性	覚せい剤経験なし	9784	(98.7)	9898	(98.6)	10381	(98.7)	30063	(98.7)
	覚せい剤経験あり	26	(.3)	43	(.4)	41	(.4)	110	(.4)
	無回答	100	(1.0)	98	(1.0)	91	(.9)	289	(.9)
	合計	9910	(100.0)	10039	(100.0)	10513	(100.0)	30462	(100.0)
($\chi^2 = 4.179, df = 2, p = .000$)									
全体	覚せい剤経験なし	20339	(98.6)	20234	(98.5)	21334	(98.6)	61907	(98.6)
	覚せい剤経験あり	69	(.3)	106	(.5)	99	(.5)	274	(.4)
	無回答	222	(1.1)	204	(1.0)	206	(1.0)	632	(1.0)
	合計	20630	(100.0)	20544	(100.0)	21639	(100.0)	62813	(100.0)
($\chi^2 = 8.116, df = 2, p = .000$)									

表58 「シンナー遊び」経験と覚せい剤乱用経験の関係

		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	覚せい剤経験なし	31247	(98.9)	354	(78.7)	202	(79.5)	31803	(98.5)
	覚せい剤経験あり	70	(.2)	86	(19.1)	3	(1.2)	159	(.5)
	無回答	281	(.9)	10	(2.2)	49	(19.3)	340	(1.1)
	合計	31598	(100.0)	450	(100.0)	254	(100.0)	32302	(100.0)
($\chi^2 = 3313.966, df = 1, p = .000$)									
女性	覚せい剤経験なし	29704	(99.0)	237	(75.5)	122	(84.1)	30063	(98.7)
	覚せい剤経験あり	39	(.1)	71	(22.6)	0	(.0)	110	(.4)
	無回答	260	(.9)	6	(1.9)	23	(15.9)	289	(.9)
	合計	30003	(100.0)	314	(100.0)	145	(100.0)	30462	(100.0)
($\chi^2 = 4391.328, df = 1, p = .000$)									
全体	覚せい剤経験なし	60989	(98.9)	593	(76.9)	325	(81.3)	61907	(98.6)
	覚せい剤経験あり	109	(.2)	162	(21.0)	3	(.8)	274	(.4)
	無回答	544	(.9)	16	(2.1)	72	(18.0)	632	(1.0)
	合計	61642	(100.0)	771	(100.0)	400	(100.0)	62813	(100.0)
($\chi^2 = 7740.977, df = 1, p = .000$)									

4. 「シンナー遊び」と覚せい剤乱用との関係

(1) 覚せい剤乱用の生涯経験率について

覚せい剤乱用の生涯経験率（これまでに1回でも経験したことがある者の率）を表57に示した。

覚せい剤の生涯経験率は、男子では0.5%（1年生0.4%、2年生0.6%、3年生0.5%）で、女子では0.4%（1年生0.3%、2年生0.4%、3年生0.4%）であり、全体では0.4%（0.3%、0.5%、0.5%）であった。

この生涯経験率の年次推移は考察で論じる。

(4) 「シンナー遊び」と覚せい剤乱用経験との関係

「シンナー遊び」の経験と覚せい剤乱用経験との関係を表58に示した。

「シンナー遊び」未経験者では、覚せい剤乱用の経験があると選んだ者は、男子で0.2%、女子で0.1%、全体で0.2%であったのに対して、「シンナー遊び」経験者では、男子で19.1%、女子で22.6%の者が、覚せい剤の乱用経験ありを選んだ。

これも、過去3回の本調査と同じ結果であり、大麻同様、中学生における「シンナー遊び」と覚

せい剤乱用との関係を強く示唆するものであった。

(5) 覚せい剤乱用による医学的害について

「覚せい剤を使うと、精神病状態になりやすく、またフラッシュバックがあることを知っていますか？」との問いに対する回答の分布を表59に示した。

「知っている」を選んだ者は男女ともに有機溶剤乱用非経験者群の方がわずかに多かったが、統計学的有意差は認められなかった。

それにしても、有機溶剤乱用経験の有無に関わらず、「知っている」者の割合は決して高いとは言えず、今後の薬物乱用防止教育の課題であると解釈された。

1. 違法薬物の入手可能性について

(1) 乱用のための有機溶剤の入手可能性について

乱用のための有機溶剤の入手可能性についての回答の分布を表60に示した。

表59 覚せい剤を使うと精神病状態になりやすく、またフラッシュバックがあることを知っていますか？

		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	知っている	18362	(58.1)	243	(54.0)	129	(50.8)	18734	(58.0)
	知らない	12860	(40.7)	190	(42.2)	107	(42.1)	13157	(40.7)
	無回答	376	(1.2)	17	(3.8)	18	(7.1)	411	(1.3)
	合計	31598	(100.0)	450	(100.0)	254	(100.0)	32302	(100.0)
$(\chi^2 = 1.276, df = 1, p = .259)$									
女性	知っている	19711	(65.7)	205	(65.3)	75	(51.7)	19991	(65.6)
	知らない	10070	(33.6)	102	(32.5)	62	(42.8)	10234	(33.6)
	無回答	222	(.7)	7	(2.2)	8	(5.5)	237	(.8)
	合計	30003	(100.0)	314	(100.0)	145	(100.0)	30462	(100.0)
$(\chi^2 = .047, df = 1, p = .828)$									
全体	知っている	38100	(61.8)	452	(58.6)	204	(51.0)	38756	(61.7)
	知らない	22943	(37.2)	294	(38.1)	170	(42.5)	23407	(37.3)
	無回答	599	(1.0)	25	(3.2)	26	(6.5)	650	(1.0)
	合計	61642	(100.0)	771	(100.0)	400	(100.0)	62813	(100.0)
$(\chi^2 = 1.046, df = 1, p = .306)$									

表60 有機溶剤の入手可能性

		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	簡単に手に入る	6689	(21.2)	212	(47.1)	63	(24.8)	6964	(21.6)
	少々苦勞するが手に入る	5327	(16.9)	89	(19.8)	34	(13.4)	5450	(16.9)
	ほとんど不可能	5683	(18.0)	45	(10.0)	36	(14.2)	5764	(17.8)
	絶対不可能	13153	(41.6)	93	(20.7)	90	(35.4)	13336	(41.3)
	無回答	746	(2.4)	11	(2.4)	31	(12.2)	788	(2.4)
	合計	31598	(100.0)	450	(100.0)	254	(100.0)	32302	(100.0)
$(\chi^2 = 204.058, df = 3, p = .000)$									
女性	簡単に手に入る	4754	(15.8)	150	(47.8)	23	(15.9)	4927	(16.2)
	少々苦勞するが手に入る	6053	(20.2)	71	(22.6)	30	(20.7)	6154	(20.2)
	ほとんど不可能	5558	(18.5)	26	(8.3)	26	(17.9)	5610	(18.4)
	絶対不可能	12932	(43.1)	60	(19.1)	49	(33.8)	13041	(42.8)
	無回答	706	(2.4)	7	(2.2)	17	(11.7)	730	(2.4)
	合計	30003	(100.0)	314	(100.0)	145	(100.0)	30462	(100.0)
$(\chi^2 = 255.854, df = 3, p = .000)$									
全体	簡単に手に入る	11452	(18.6)	364	(47.2)	87	(21.8)	11903	(18.9)
	少々苦勞するが手に入る	11391	(18.5)	161	(20.9)	64	(16.0)	11616	(18.5)
	ほとんど不可能	11244	(18.2)	72	(9.3)	62	(15.5)	11378	(18.1)
	絶対不可能	26101	(42.3)	155	(20.1)	139	(34.8)	26395	(42.0)
	無回答	1454	(2.4)	19	(2.5)	48	(12.0)	1521	(2.4)
	合計	61642	(100.0)	771	(100.0)	400	(100.0)	62813	(100.0)
$(\chi^2 = 455.424, df = 3, p = .000)$									

表61 大麻の入手可能性

		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	簡単に手に入る	2998	(9.5)	125	(27.8)	38	(15.0)	3161	(9.8)
	少々苦勞するが手に入る	4825	(15.3)	94	(20.9)	28	(11.0)	4947	(15.3)
	ほとんど不可能	6621	(21.0)	74	(16.4)	46	(18.1)	6741	(20.9)
	絶対不可能	16483	(52.2)	146	(32.4)	110	(43.3)	16739	(51.8)
	無回答	671	(2.1)	11	(2.4)	32	(12.6)	714	(2.2)
	合計	31598	(100.0)	450	(100.0)	254	(100.0)	32302	(100.0)
$(\chi^2 = 199.637, df = 3, p = .000)$									
女性	簡単に手に入る	2370	(7.9)	91	(29.0)	14	(9.7)	2475	(8.1)
	少々苦勞するが手に入る	5403	(18.0)	84	(26.8)	26	(17.9)	5513	(18.1)
	ほとんど不可能	6194	(20.6)	48	(15.3)	33	(22.8)	6275	(20.6)
	絶対不可能	15381	(51.3)	84	(26.8)	53	(36.6)	15518	(50.9)
	無回答	655	(2.2)	7	(2.2)	19	(13.1)	681	(2.2)
	合計	30003	(100.0)	314	(100.0)	145	(100.0)	30462	(100.0)
$(\chi^2 = 224.302, df = 3, p = .000)$									
全体	簡単に手に入る	5374	(8.7)	218	(28.3)	52	(13.0)	5644	(9.0)
	少々苦勞するが手に入る	10239	(16.6)	179	(23.2)	54	(13.5)	10472	(16.7)
	ほとんど不可能	12822	(20.8)	123	(16.0)	79	(19.8)	13024	(20.7)
	絶対不可能	31879	(51.7)	232	(30.1)	163	(40.8)	32274	(51.4)
	無回答	1328	(2.2)	19	(2.5)	52	(13.0)	1399	(2.2)
	合計	61642	(100.0)	771	(100.0)	400	(100.0)	62813	(100.0)
$(\chi^2 = 424.116, df = 3, p = .000)$									

「シンナー遊び」非経験者群では、「ほとんど不可能」「絶対不可能」を選んだ者の合計が男性で60%、女性で62%と半数を超えていたが、「シンナー遊び」経験者群では、「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだの者の合計は、男性で67%、女性で70%にものぼった。全体では「シンナー遊び」非経験者群では、「ほとんど不可能」「絶対不可能」を選んだ者の合計が61%であるのに対して、「シンナー遊び」経験者群では、「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだの者の合計が、逆に68%にものぼっていた。両群間には明らかな違い ($p < 0.01$) が認められた。

(2) 大麻の入手可能性について

大麻の入手可能性についての回答の分布を表61に示した。

「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだの者の合計は、「シンナー

遊び」未経験者群では、男子で25%、女子で26%であり、経験者群では、男子で48%、女子で56%であり、両群には有意差 ($p < 0.01$) が認められ、「シンナー遊び」経験者群での大麻入手可能性の高さが強く示唆された。

また、1998年調査では、入手可能性は男性の方が高かったが、2000年調査及び今回は%上は女性の方が高くなっていた。

(3) 覚せい剤の入手可能性について

覚せい剤の入手可能性についての回答の分布を表62に示した。

「簡単に手に入る」「少々苦勞するが、なんとか手に入る」を選んだの者の合計は、「シンナー遊び」未経験者群では、男子で24%、女子で27%であり、経験者群では、男性で47%、女性で56%であり、両群には有意差 ($p < 0.01$) が認められた。

この結果は、大麻の入手可能性の値とほぼ同じであり、同時に、「シンナー遊び」経験者群での

表62 覚せい剤の入手可能性

		生涯シンナー経験						全体	
		経験なし		経験あり		無回答			
男性	簡単に手に入る	3131	(9.9)	122	(27.1)	29	(11.4)	3282	(10.2)
	少々苦勞するが手に入る	4668	(14.8)	90	(20.0)	35	(13.8)	4793	(14.8)
	ほとんど不可能	6303	(19.9)	74	(16.4)	43	(16.9)	6420	(19.9)
	絶対不可能	16872	(53.4)	155	(34.4)	118	(46.5)	17145	(53.1)
	無回答	624	(2.0)	9	(2.0)	29	(11.4)	662	(2.0)
	合計	31598	(100.0)	450	(100.0)	254	(100.0)	32302	(100.0)
$(\chi^2 = 170.284, df = 3, p = .000)$									
女性	簡単に手に入る	2856	(9.5)	90	(28.7)	18	(12.4)	2964	(9.7)
	少々苦勞するが手に入る	5363	(17.9)	87	(27.7)	24	(16.6)	5474	(18.0)
	ほとんど不可能	5824	(19.4)	44	(14.0)	24	(16.6)	5892	(19.3)
	絶対不可能	15340	(51.1)	85	(27.1)	65	(44.8)	15490	(50.9)
	無回答	620	(2.1)	8	(2.5)	14	(9.7)	642	(2.1)
	合計	30003	(100.0)	314	(100.0)	145	(100.0)	30462	(100.0)
$(\chi^2 = 174.766, df = 3, p = .000)$									
全体	簡単に手に入る	5994	(9.7)	214	(27.8)	47	(11.8)	6255	(10.0)
	少々苦勞するが手に入る	10041	(16.3)	178	(23.1)	59	(14.8)	10278	(16.4)
	ほとんど不可能	12132	(19.7)	119	(15.4)	67	(16.8)	12318	(19.6)
	絶対不可能	32229	(52.3)	242	(31.4)	183	(45.8)	32654	(52.0)
	無回答	1246	(2.0)	18	(2.3)	44	(11.0)	1308	(2.1)
	合計	61642	(100.0)	771	(100.0)	400	(100.0)	62813	(100.0)
$(\chi^2 = 342.390, df = 3, p = .000)$									

覚せい剤入手可能性の高さが強く示唆された。

また、1998年調査では、入手可能性は男女で拮抗していたが、2000年調査及び今回は%上は女性の方が高くなっていた。

以上、3つの違法性薬物の入手可能性については、考察で論じたい。

D. 考察

1. 本調査研究の位置づけ

わが国の中学生における「シンナー遊び」の広がりについての調査研究で、地域特性を考慮して行われた大規模なものとしては、当分担研究者の知る限り、1990年から原則2年に1回、当分担研究者らによって実施されてきた千葉県公立中学校調査⁵⁾¹²⁾¹⁴⁾と、1996年から2年に1回、厚生科学研究費補助金により、当分担研究者らにより継続調査されてきた全国調査¹⁰⁾¹³⁾²⁰⁾に限られている。

その結果、有機溶剤乱用の生涯経験率が明らかになり、有機溶剤乱用経験者群では非経験者群に比べて、日常生活の規則性が有意に乱れており、家族性が希薄（精神的単親家庭⁹⁾と称した）で、友人関係にも難があることを明らかにしてきた⁵⁾¹²⁾¹⁴⁾。

また、地域的には、有機溶剤の乱用は昼夜人口比と強い相関があり、夜間に人口が多く、昼間に人口の少ない地域ほど経験率が高いこと¹⁹⁾、及び、有機溶剤の乱用経験と喫煙経験・喫煙頻度とは強い相関があり⁹⁾、わが国の中学生では喫煙が有機溶剤乱用へのGateway Drug³⁾となっている可能性が高いことも指摘してきた。

今回の調査研究は、上記一連の調査研究を継続的に発展させたものであり、わが国では薬物乱用に関する第4回目の全国中学生調査である。

2. 「シンナー遊び」の広がりについて

今回の調査研究では、「シンナー遊び」の生涯経験率は、男子では1.4%（1年生1.3%、2年生1.4%、3年生1.5%）、女子では1.0%（1年生1.0%、2年生1.1%、3年生1.0%）、全体では1.2%（1年生1.2%、2年生1.3%、3年生1.3%）であった。表63、図1は生涯経験率の年次推移を示しているが、2000年調査との比較では、男子及び全体では減少してはいるものの、女子では増加傾向が見られる結果であった。

一方、千葉県での今回の結果では生涯経験率が増加に転じており、その最大の原因は女子での生涯経験率の急増によると推定できる（表63）。

したがって、全国結果も千葉県での結果も女子

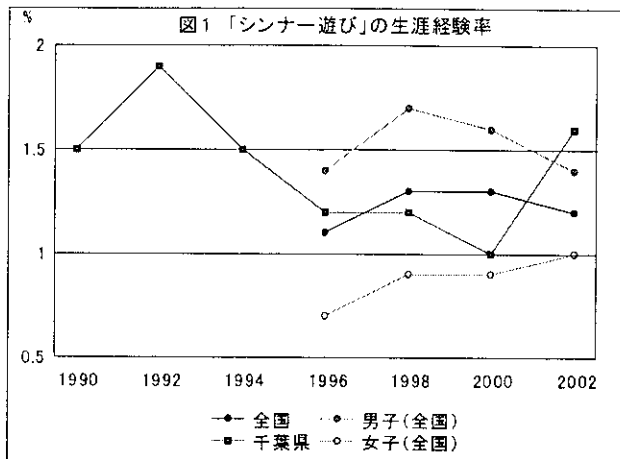
表63 「シンナー遊び」生涯経験率の推移（%）（「無回答」を除いて計算したもの）

千葉県

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1990	2.1	1.2	2.9	2.3	0.9	0.4	0.8	1.7	1.5	0.8	1.9	1.9	12	5,240
1992	2.5	1.8	3.5	2.0	1.2	0.9	1.2	1.5	1.9	1.4	2.4	1.8	14	6,092
1994	1.9	1.1	2.3	2.3	1.1	1.0	1.2	1.1	1.5	1.0	1.8	1.7	15	6,623
1996	1.5	1.4	1.3	1.9	0.8	0.6	0.7	1.2	1.2	1.0	1.0	1.6	8	4,476
1998	1.7	0.8	1.8	2.6	0.6	0.7	0.7	0.3	1.2	0.8	1.2	1.4	9	5,326
2000	1.5	1.1	1.3	2.2	0.5	0.5	0.3	0.6	1.0	0.8	0.8	1.3	7	3,733
2002	1.5	1.2	1.9	1.3	1.7	1.8	2.8	0.7	1.6	1.5	2.4	1.0	7	3,498

全国

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	1.4	1.2	1.3	1.7	0.7	0.7	0.6	0.9	1.1	0.9	1.0	1.3	108	53,440
1998	1.7	1.2	1.6	2.3	0.9	0.9	0.8	1.1	1.3	1.1	1.2	1.7	148	71,299
2000	1.6	1.4	1.6	1.9	0.9	0.8	0.8	1.1	1.3	1.1	1.2	1.5	140	61,675
2002	1.4	1.3	1.4	1.5	1.0	1.0	1.1	1.0	1.2	1.2	1.3	1.3	149	62,413



での増加という傾向は同じである。社会への女性参画が進むと、薬物乱用の男女差が少なくなる傾向が世界的に認められるが、この女子での増加傾向は危惧されるところである。

一方、1年経験率は、流行の勢いを探る意味では生涯経験率よりは優れているはずである。しかし、個人情報の秘密保持という意味でのバイアスは生涯経験率よりは高いと考えられる。そのためか、今回を含めて過去3回の調査では、すべて「経験あり」の人数よりは「無回答」の人数の方が多いという結果であった。しかし、今回、千葉県での生涯経験率と千葉県、全国での女子における生涯経験率が増加していることから、「流行の勢い」を探るために、1年経験率の推移を参考として載せた(表64、図2)。

図2及び表64に見るように、1年経験率は千葉県でも全国でも男子では2000年よりは下降気味であるが、女子ではいずれの場合も上昇気味であり、要注意である。したがって、有機溶剤乱用の広がりには、一応治まっているようではあるが、今後、女子での乱用増加につられて、男子での乱用も増加するようであれば、全体での乱用も増加する可能性があり、要注意状態にあると推定される。

ところで、この種の調査で最も問題になるのは、結果の信頼性であろう。この信頼性は、自記式調

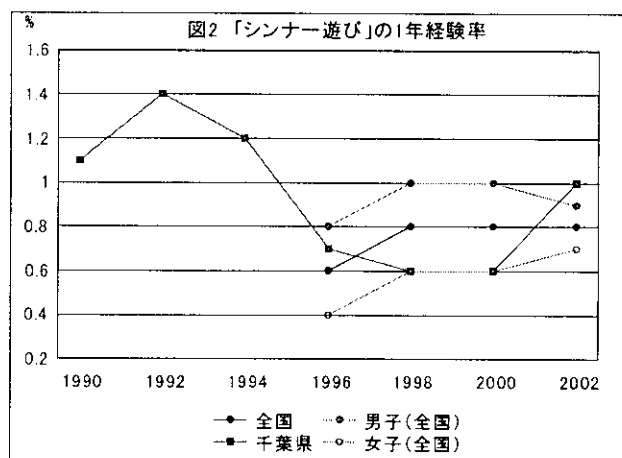


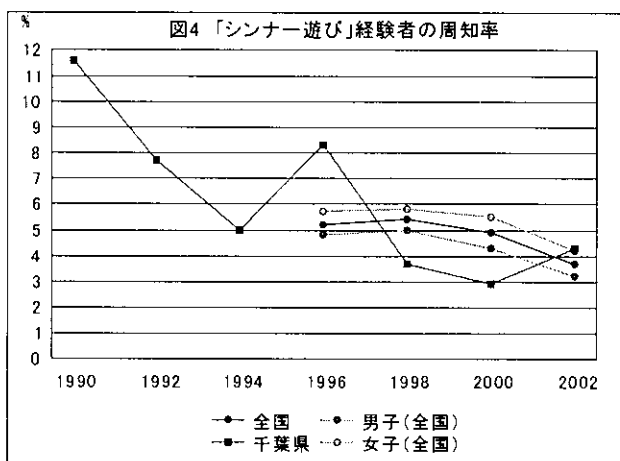
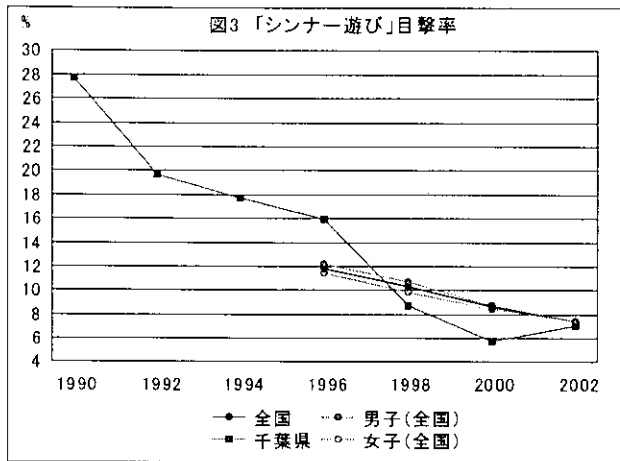
表64 「シンナー遊び」1年経験率の推移 (%) (「無回答」を除いて計算したもの)

千葉県

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1990	1.4	0.8	2.0	1.3	0.8	0.3	0.5	1.3	1.1	0.6	1.3	1.3	12	5,219
1992	1.8	1.3	2.7	1.5	0.9	0.5	1.1	1.1	1.4	0.9	1.9	1.3	14	6,090
1994	1.5	0.8	1.8	1.8	1.0	0.9	1.1	0.9	1.2	0.9	1.5	1.4	15	6,626
1996	0.9	1.1	0.5	1.0	0.5	0.6	0.1	0.7	0.7	0.9	0.3	0.9	8	4,370
1998	1.0	0.4	1.0	1.5	0.3	0.3	0.3	0.3	0.6	0.3	0.7	0.9	9	5,256
2000	0.9	0.8	0.3	1.6	0.4	0.4	0.3	0.4	0.6	0.5	0.3	1.0	7	3,641
2002	0.8	0.5	0.9	1.0	1.1	1.3	1.8	0.3	1.0	0.9	1.3	0.7	7	3,418

全国

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	0.8	0.6	0.8	1.0	0.4	0.4	0.4	0.6	0.6	0.5	0.6	0.8	108	52,229
1998	1.0	0.7	0.9	1.3	0.6	0.6	0.5	0.7	0.8	0.6	0.7	1.0	148	70,302
2000	1.0	0.8	0.9	1.1	0.6	0.5	0.5	0.7	0.8	0.6	0.7	0.9	140	60,280
2002	0.9	0.8	0.9	0.9	0.7	0.7	0.8	0.7	0.8	0.7	0.8	0.8	149	60,800



査と同時に、何らかの客観的検査（たとえば尿からの馬尿酸の測定）を実施することによって、初めて明らかになることである。しかしながら、尿検査の実施は、個人の人権上の問題にも関わる難しい方法であり、実施は事実上不可能である。したがって、当研究者らは、類似した方法論にもとづく継続的な調査の結果によるトレンドを見ることが、本調査研究の主目的であると考えている。

同時に「シンナー遊び」の広がりが増減を判断するには、生涯経験率だけではなく、いくつかの関連する指標の結果をも考慮して、総合的に判断する必要があると考えている。

そこで採用しているのが、「シンナー遊び」をこれまでに目撃したことのある者の率（生涯目撃率：表65、図3）、身近に「シンナー遊び」をしている人を知っている者の率（乱用者周知率：表66、図4）、「シンナー遊び」に誘われたことのある者の率（生涯被誘惑率：表67、図5）である。それらを見ると、目撃率、乱用者周知率は確実に減少傾向にあり、有機溶剤乱用の「流行の勢い」が弱くなってきていることが強く示唆される。しかし、生涯被誘惑率は、男子で減少傾向が見られるものの、女子では増加傾向にあり、今回の2002年調査では男女差がなくなってしまっている。これも生涯経験率、1年経験率で述べた特徴と同じであり、

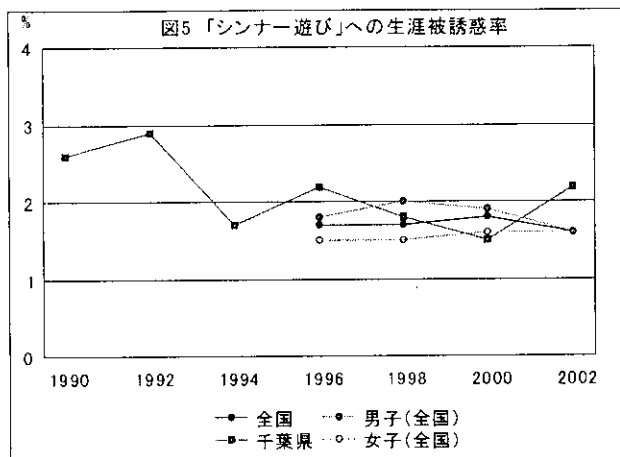
表65 「シンナー遊び」を実際に見たことがある者の率 (%)（「無回答」を除いて計算したもの）

千葉県

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1990	27.5	23.8	26.5	31.7	27.9	22.0	27.9	32.2	27.7	22.9	27.1	32.0	12	5,212
1992	22.1	18.8	22.3	25.2	17.2	13.8	17.1	20.4	19.7	10.4	19.7	22.7	14	6,018
1994	19.1	17.2	19.2	20.6	16.3	12.8	17.4	18.6	17.7	15.1	18.2	19.6	15	6,766
1996	16.5	12.6	17.6	19.0	15.2	11.9	15.0	18.6	15.9	12.3	16.3	18.8	8	4,508
1998	9.9	6.3	9.7	13.4	7.5	6.7	7.6	8.1	8.7	6.5	8.6	10.8	9	5,344
2000	5.7	4.0	6.9	6.0	5.6	6.2	5.0	5.6	5.7	5.1	5.9	5.8	7	2,745
2002	7.0	7.1	7.7	6.1	6.9	6.9	7.2	6.7	7.0	7.0	7.5	6.4	7	3,510

全国

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	12.2	9.9	12.6	14.1	11.4	9.2	12.0	13.1	11.8	9.5	12.3	13.6	108	53,863
1998	10.7	8.8	10.0	13.3	9.8	8.3	9.5	11.5	10.3	8.5	9.7	12.4	148	71,599
2000	8.7	7.5	8.3	10.2	8.4	7.0	7.9	10.2	8.6	7.2	8.1	10.2	140	61,905
2002	7.4	6.3	7.6	8.3	7.4	6.8	7.3	7.9	7.4	6.6	7.5	8.1	149	62,611



要注意傾向を示すものであると考えられる。

ちなみに本調査の記載上の「正確さ」を見るため、有機溶剤未経験者における「シンナー遊び」についての気持ちに関し、回答の矛盾を表8に示した。それを見る限り、調査用紙への記載に関しては、本調査は極めて正確に実施されていると推定される。

以上を総合すると、全体では、「シンナー遊び」の「流行の勢い」は確実に弱くなって来ているようだが、生涯経験率、生涯被誘惑率における男女差がなくなってきており、また、千葉県での今回の結果では生涯経験率、目撃率、乱用者周知率、生涯非誘惑率の全てが増加に転じており、特に生

涯経験率の急増は女子での生涯経験率の急増によるものであり(表63)、今後全国でも増加に転じる可能性もあり、手放して喜べる状態とは言い難い。

3. 「シンナー遊び」と日常生活・家庭生活・友人関係

「シンナー遊び」経験者群と非経験者群との比較では、「起床時間の規則性」(表20)、「就床時間の規則性」(表21)、「朝食の摂取率」(表22)から見た日常生活の規則性、及び「学校生活への思い」(表23)、「クラブ活動の参加状況」(表24)、「親しく遊べる友人の存在」(表30)、「相談事の出来る友人の存在」(表31)において、統計的有意差が認められており、「シンナー遊び」経験者群での日常生活の不規則さ、学校生活への不満、友人関係の希薄さが明かである。

これらの背景には、そもそもの家庭生活のあり方が大きく影響していると考えられるが、表25～27に見る家族との夕食頻度の差は、今回の調査でも「シンナー遊び」経験者群と非経験者群とで有意差を示していた。

ところで、「父親との夕食頻度(表27)」は、「家族全員での夕食頻度(表25)」よりも低率になっ

表66 身近に「シンナー遊び」をしている人がいると答えた者の割合(乱用者周知率)(%)
(「無回答」を除いて掲載したもの)

千葉県

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1990	9.4	5.6	10.4	11.8	14.0	8.2	14.2	18.1	11.6	6.8	12.2	14.9	12	5,197
1992	7.1	4.2	8.9	8.1	8.3	6.1	9.5	9.0	7.7	5.1	9.2	8.6	14	6,072
1994	4.6	3.7	4.2	5.7	5.4	3.3	6.5	6.5	5.0	3.5	5.3	6.1	15	6,756
1996	9.2	7.1	10.9	9.4	7.3	4.8	8.3	8.7	8.3	6.0	9.6	9.0	8	4,493
1998	3.7	2.3	3.6	5.1	3.6	3.5	4.1	3.3	3.7	2.9	3.8	4.2	9	5,331
2000	2.4	1.7	2.2	3.1	3.2	3.4	2.4	3.9	2.9	2.6	2.3	3.6	7	3,742
2002	4.0	3.1	4.7	4.0	4.7	4.6	5.7	3.7	4.3	3.9	5.2	3.9	7	3,508

全国

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	4.8	3.6	4.6	6.4	5.7	3.9	6.2	6.9	5.2	3.7	5.4	6.6	108	53,697
1998	5.0	3.4	4.9	6.6	5.8	4.1	5.8	7.4	5.4	3.7	5.4	7.0	148	71,379
2000	4.3	2.9	4.5	5.5	5.5	4.0	5.1	7.4	4.9	3.4	4.8	6.5	140	61,773
2002	3.2	2.4	3.5	3.7	4.2	3.3	4.4	4.7	3.7	2.8	3.9	4.2	149	62,517

ており、これは明らかに矛盾である。しかも、この矛盾は、これまでの同種の調査⁵⁾¹⁰⁾¹²⁾¹³⁾¹⁴⁾でも毎回認められており、中学生の考えの中には、「家族全員での夕食」と言った時、父親の存在は既に除外されている傾向がそれなりにあることを示唆している。つまり、その背景には、父親はいつも帰りが遅いものだという中学生の考え方を伺うことができる。

そもそも、当研究者らは、夕食には「一家団欒」という意味合いがあると考えて調査項目に入れてきた。しかし、この夕食頻度には地域差が大きく、都市部ほど低く、農村部・山間部ほど高い傾向がある。「一家団欒」には、家族としての精神的意味合いも含まれるが、特に都市部における生活様式の多様性を考慮すると、親子の共有時間についての、もう少し直接的な項目が必要であると考えていた。そこで「学校、塾、習い事、運動での時間以外、大人が不在の状態、毎日平均どの程度の時間を過ごしますか？」という項目も1998年より調べている(表28)。その結果、「シンナー遊び」経験者群では非経験者群に比べて、一日3時間以上大人不在で過ごす者が有意に多いことがわかった。結局、夕食頻度の少なさも、親子の共有時間の少なさの一現れとして解釈できる。

また、中学生という年代は、基本的に親との相

談頻度は低いようであるが(表29)、それでも「シンナー遊び」経験者群での相談頻度は有意に低く(表29)、ここでも「シンナー遊び」経験者群における親子の共有時間の少なさが示唆された。

以上により、今回も、「シンナー遊び」経験者群は、総体的に見れば、家庭にも、学校にもなじみず、友人関係も希薄な中学生たちが多く、「居場所のない子供たち」⁵⁾¹⁰⁾¹⁸⁾が多いという推定が成り立つと考えている。

表11～表12は「シンナー遊び」をしている者について、どのような認識を持っているのかを調べたものである。表11～12では、経験者群と非経験者群での捉え方に、明らかな乖離が認められる。非経験者から見れば、経験者はほとんど「無関係」な人たち(90%以上)であり、経験者から見れば「気持ちが理解できる気がする」人たちである割合が非常に高いということである。本研究者らは、「シンナー遊び」経験者にとってわかる気がするという、その気持ちとは、受容感と帰属感を求める「居場所のない子供たち」⁵⁾¹⁰⁾の共通の思いであろうと推測している。

有機溶剤乱用者への治療的介入の際に、当研究者らは、親の参加なくして子の回復はないと考えており、親子の共有時間を増やすことの重要性を説いているが⁵⁾¹⁰⁾¹⁸⁾、今回の結果もその有力な根拠

表67 「シンナー遊び」に誘われたことのある率の推移 (有機溶剤乱用の生涯被誘惑率)(%)
(「無回答」を除いて計算したもの)

千葉県

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1990	3.0	2.0	3.5	3.5	2.2	0.8	2.0	3.3	2.6	1.5	2.8	3.3	12	5,156
1992	3.1	2.1	3.6	3.5	2.7	1.2	3.2	3.7	2.9	1.7	3.4	3.6	14	6,058
1994	2.0	0.3	2.0	3.5	1.5	1.1	1.1	2.1	1.7	0.7	1.5	2.8	15	6,700
1996	2.4	1.0	2.7	3.1	2.0	1.9	1.8	2.4	2.2	1.4	2.3	2.8	8	4,436
1998	2.6	1.0	3.3	3.6	0.9	1.2	0.9	0.7	1.8	1.1	2.1	2.2	9	5,061
2000	1.6	0.8	1.1	2.7	1.3	2.0	0.7	1.4	1.5	1.4	0.9	2.1	7	3,605
2002	1.8	1.8	2.0	1.7	2.6	1.9	3.1	2.7	2.2	1.8	2.6	2.2	7	3,366

全国

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	1.8	1.2	1.7	2.5	1.5	1.2	1.6	1.9	1.7	1.2	1.6	2.2	108	53,169
1998	2.0	1.0	1.9	2.9	1.5	0.9	1.5	2.0	1.7	0.9	1.7	2.5	148	67,776
2000	1.9	1.3	1.8	2.6	1.6	1.2	1.4	2.2	1.8	1.2	1.6	2.4	140	59,640
2002	1.6	1.1	1.7	1.9	1.6	1.3	1.7	1.9	1.6	1.2	1.7	1.9	149	59,988

表68 有機溶剤乱用による害知識周知率の推移 (%)

(「無回答」をそのまま生かし、「知っている」と答えた者の割合)

急性中毒死

	男性	女性	全体
1996	59.9	64.6	62.2
1998	65.3	70.1	67.6
2000	60.5	66.8	63.6
2002	61.2	65.8	63.4

歯の腐食

	男性	女性	全体
1996	55.4	52.2	53.8
1998	53.2	51.0	52.2
2000	55.8	55.8	55.8
2002	60.9	62.2	61.5

多発神経炎

	男性	女性	全体
1996	55.9	60.3	58.1
1998	60.4	65.9	63.0
2000	53.1	60.1	56.6
2002	56.2	62.1	59.1

精神病

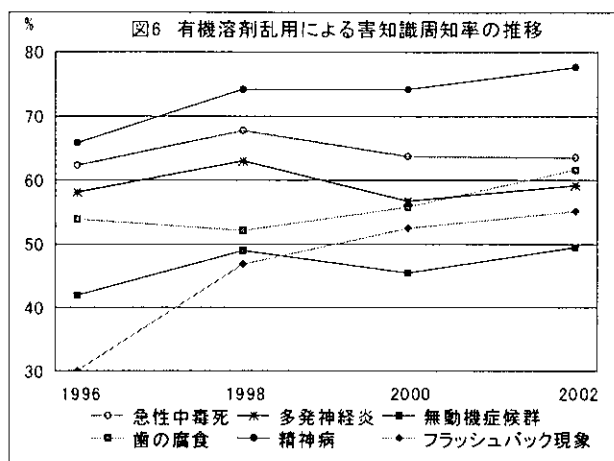
	男性	女性	全体
1996	64.1	67.2	65.7
1998	72.5	75.8	74.1
2000	72.0	76.4	74.2
2002	75.3	80.3	77.7

無動機症候群

	男性	女性	全体
1996	37.6	46.4	41.9
1998	45.3	53.0	49.0
2000	42.3	48.6	45.4
2002	46.6	52.6	49.5

フラッシュバック現象

	男性	女性	全体
1996	29.9	30.3	30.1
1998	47.5	46.3	46.9
2000	51.3	53.6	52.5
2002	53.3	57.1	55.1



である。

しかも、経験論的には、本調査の結果を保護者に紹介することが、保護者の意識変革には重要なようである。

4. 「シンナー遊び」による医学的害

薬物乱用防止には、薬物乱用による諸害をきちんと認識させることが重要である。ところが、「知識」があれば乱用しないかという、そうとも言えない面がある。これまでの調査では、往々にして、害知識は有機溶剤乱用経験者群の方が高いという傾向が認められていた³⁾¹⁰⁾¹³⁾¹⁴⁾²⁰⁾。

しかし、今回の調査では、急性中毒死、歯の腐食、多発神経炎に関する男子、精神病に関する男女では、非経験者群の方で「知っている」を選んだ者が多く、それ以外の害知識でも、経験者群VS非経験者群で有意差が認められない項目が出てきた。これは、「害を知らない者が乱用しやすい」という仮説があるとすれば、期待される結果であり、ここ数年の薬物乱用防止教育推進による成果の可能性もある。

しかし、図6は害知識周知率の年次推移を示している。ほとんどの害知識の周知率が増加傾向にあることは好ましい傾向であるが、急性中毒死に関しては下降気味であり、そもそも精神病に関する周知率以外は、決して高い周知率とは言えず、薬物乱用防止教育の一層の推進が望まれる。

なお、薬物乱用防止教育には、「知識が行動に結びつくとは限らない」という大きな課題が常に存在するわけで、これに関しては、知識教育を行った上で、次の段階として、薬物依存からの回復

の苦しみをドキュメンタリー形式で紹介したビデオ（平成9年度文部省制作「なくした自由」）の活用が期待される。

5. 大麻・覚せい剤の乱用経験

そもそも、大麻及び覚せい剤の乱用経験率は、調査結果上、これまで同様に「経験あり」よりは「無回答」の方が数字が大きいため（表53、表57）、参考データとした方が妥当と思われるが、参考データは参考データなりに推移を見る必要がある。

図7、図8に見るように、大麻も覚せい剤も1998年に比べると、生涯経験率は減少傾向にあるが、2000年との比較では、大麻は男女を問わない全体で上昇し、覚せい剤は横ばいであった。しかも、この背景には、大麻でも覚せい剤でも、女子での生涯経験率が上昇していることが最大の要因であると推定される。有機溶剤乱用の生涯経験率でも述べたが、ここでも女子における生涯経験率の上昇が特徴であった。

第3次覚せい剤乱用期の特徴の一つは、若年層までへの乱用の拡大であるが、その中でも女子における薬物乱用の拡大には注意を払う必要がある。

以上のように大麻・覚せい剤についての生涯経験率はあくまで参考データであるため、利用法の限界はあるが、参考までに有機溶剤・大麻・覚せい剤のいずれかの生涯経験率と大麻・覚せい剤のいずれかの生涯経験率を表71、表72に示した。ここでも、2000年調査との比較では、女子における増加傾向が特徴的である。

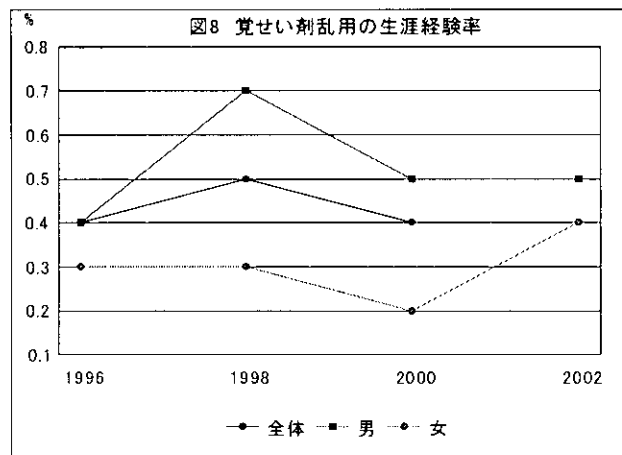
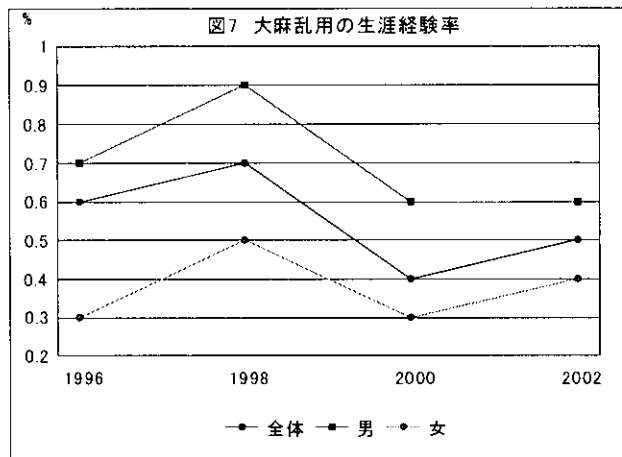


表69 大麻乱用の生涯経験率の推移 (%)（「無回答」を除いて計算したもの）

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	0.7	0.4	0.8	0.9	0.3	0.3	0.3	0.3	0.6	0.4	0.5	0.6	108	53,271
1998	0.9	0.8	0.8	1.0	0.5	0.5	0.4	0.5	0.7	0.6	0.6	0.8	148	70,846
2000	0.6	0.4	0.6	0.7	0.3	0.2	0.4	0.3	0.4	0.3	0.5	0.5	140	61,477
2002	0.6	0.4	0.8	0.7	0.4	0.3	0.6	0.4	0.5	0.4	0.7	0.5	149	62,255

表70 覚せい剤乱用の生涯経験率の推移 (%)（「無回答」を除いて計算したもの）

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	0.4	0.3	0.4	0.5	0.3	0.3	0.2	0.3	0.4	0.3	0.3	0.4	108	53,197
1998	0.7	0.5	0.7	0.8	0.3	0.2	0.3	0.4	0.5	0.4	0.5	0.6	148	70,819
2000	0.5	0.5	0.5	0.6	0.2	0.2	0.3	0.3	0.4	0.3	0.4	0.4	140	61,457
2002	0.5	0.4	0.6	0.5	0.4	0.3	0.4	0.4	0.4	0.3	0.5	0.5	149	62,181

6. 大麻・覚せい剤乱用による医学的害

大麻、覚せい剤乱用による医学的害知識の周知度は、表56、表59の通りである。

大麻による精神病・無動機症候群に関しては、1998年調査の女性を除けば、2000年調査までは、男女ともに有機溶剤乱用群の方が周知率が有意に高かった。しかし、今回、その傾向は同じであるが、初めて有機溶剤乱用経験の有無による有意差がなくなった。

また、覚せい剤乱用による精神病・フラッシュバック現象に関しては、男子では1996年調査、1998年調査では有機溶剤乱用群での周知率が有意に高かったが、2000年及び今回は、有意差はないものの有機溶剤乱用非経験者群の方がわずかに周知率は高いというように変化してきている。

これらは、有機溶剤乱用による医学的害の部分で述べた通り、「害を知らない者が乱しやすい」という仮説があるとすれば、期待される結果であり（ただし、表56、表59は大麻ないしは覚せい剤の乱用経験とそれぞれの薬物による害知識をクロスさせたものではないが）、ここ数年の薬物乱用防止教育推進による成果の可能性がある（図9、図10）。しかし、そもそもの周知率は高いとは言えず、今後一層の薬物乱用防止教育が必要と考えられる。

7. 違法薬物の入手可能性の比較

1993年以来、一部の外国人を中心に、大麻および覚せい剤が、大都会では路上で密売されるようになり、第3次覚せい剤乱用期を作り出した⁹⁾。その影響と思われるが、1996年の1年間に覚せい剤取締法により検挙された高校生数は対前年度比2.3倍と激増した⁹⁾。いくら有機溶剤乱用の勢いが鈍ったと言っても、この現実、わが国の薬物汚染状況の深刻化を象徴する以外の何物でもない。

表74は、本調査による違法薬物の入手可能性の比較である。

表73 大麻及び覚せい剤乱用による害知識周知率の推移 (%)

（「無回答」をそのまま生かし、「知っている」と答えた者の割合）

大麻乱用による精神病、無動機症候群

	男性	女性	全体
1996	48.3	45.4	46.9
1998	48.0	46.4	47.2
2000	45.8	45.8	45.8
2002	52.4	56.4	54.4

覚せい剤乱用による精神病、フラッシュバック現象

	男性	女性	全体
1996	42.5	46.5	44.5
1998	53.9	57.9	55.8
2000	55.4	61.3	58.3
2002	58.0	65.6	61.7

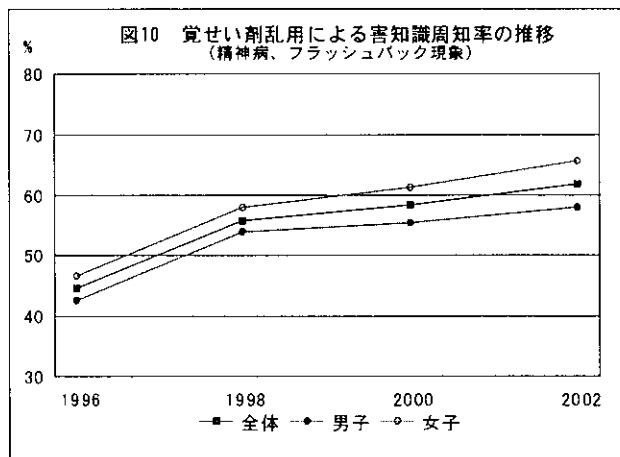
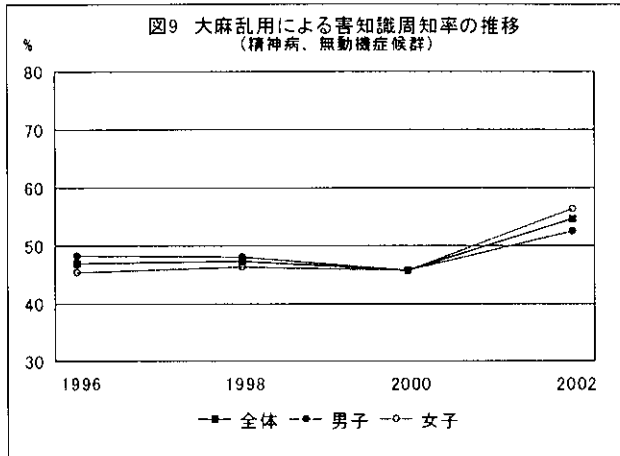
表71 有機溶剤・大麻・覚せい剤のいずれかの乱用の生涯経験率 (%)

（無回答を除いて計算したもの）

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	1.8	1.5	1.8	2.2	1.0	0.9	1.0	1.0	1.5	1.3	1.5	1.7	108	54,136
1998	2.3	1.8	2.1	2.9	1.2	1.2	1.1	1.3	1.8	1.5	1.6	2.2	148	71,245
2000	2.0	1.7	2.0	2.3	1.1	1.0	1.0	1.2	1.5	1.4	1.5	1.8	140	61,481
2002	1.8	1.7	1.9	1.9	1.3	1.2	1.4	1.3	1.6	1.5	1.7	1.6	149	61,668

表72 大麻・覚せい剤のいずれかの乱用の生涯経験率 (%)（無回答を除いて計算したもの）

	男性	1年生	2年生	3年生	女性	1年生	2年生	3年生	全体	1年生	2年生	3年生	校数	人数
1996	0.8	0.5	0.8	1.0	0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.5	0.7	0.8	108	54,116
1998	1.0	0.9	1.0	1.2	0.5	0.5	0.5	0.6	0.8	0.7	0.8	0.9	148	71,245
2000	0.8	0.6	0.7	0.9	0.4	0.3	0.4	0.4	0.6	0.5	0.6	0.6	140	61,481
2002	0.8	0.6	0.9	0.8	0.5	0.4	0.6	0.6	0.7	0.5	0.8	0.7	149	61,668



有機溶剤は日常生活上の必需品であり、その気になれば入手は極めて簡単である。しかし、表74の結果は入手可能を選んだ者が、予想外に少ない。どうやら、「シンナー遊び」のための「有機溶剤」という問いの言葉から、トルエンの入手を想定した者が多かった可能性がある。ただし、大麻、覚せい剤の入手可能性に比べれば、「シンナー遊び」の経験の有無に関わらず、常に高い結果であり、実感として納得できるところである。

問題は大麻及び覚せい剤の入手可能性である。男女に限らず、有機溶剤乱用非経験者群では「絶対不可能」を選んだ者が大麻でも覚せい剤でも50%を超えているが(表61、表62)、有機溶剤乱用経験者群では、大麻でも覚せい剤でも男子で47~48%、女子で56%の者が入手可能(「簡単に手に入る」と「少々苦勞するが手に入る」を選択した者の合計)を選択していた(表61、表62)。

これらの結果は、わが国の中学生にとって、有機溶剤を乱用すると言うことは、大麻、覚せい剤

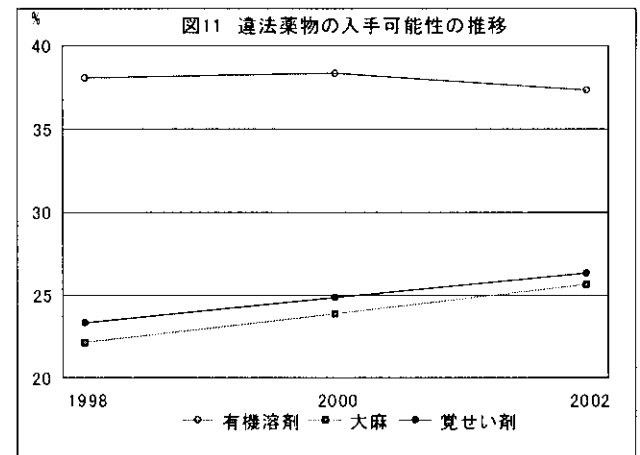
表74 違法薬物の入手可能性の比較

(「簡単に手に入る」と「少々苦勞するが手に入る」を選択した者の合計)

有機溶剤			
	男性	女性	全体
1998	41.6	34.4	38.1
2000	41.1	35.6	38.4
2002	38.5	36.4	37.4

大麻			
	男性	女性	全体
1998	23.2	21.1	22.2
2000	24.1	23.8	23.9
2002	25.1	26.2	25.7

覚せい剤			
	男性	女性	全体
1998	24.0	22.6	23.4
2000	24.4	25.5	24.9
2002	25.0	27.7	26.4



が身近なものになるという特徴を示唆している。また、図11は有機溶剤乱用経験の有無に関わらず、全体での違法薬物の入手可能性の推移を示している。大麻、覚せい剤の入手可能性は確実に増大しているものであり、さらに表74に示したとおり、ここでも女子における増加が特徴的である。

8. 薬物乱用に対する法の遵守性

わが国の規制薬物乱用が、多くの国に比べて少ない背景には、国民の法に対する遵守性の高さが

あるのではないかと本研究者らは推定している。

喫煙については非喫煙群全体の10.2%（表34）の者が「少々ならかまわない」を選んでいるのに対して、「シンナー遊び」に関しては、それを選んだ者は「シンナー遊び」非経験者群全体の3%（表9）に過ぎず、大麻では「シンナー遊び」非経験者全体の2%（表55）であったことは、同じ依存性薬物と言えども、有機溶剤及び大麻乱用への心理的垣根は喫煙よりはるかに高いことを物語っている。（覚せい剤に関しては、尋ねていない）

しかも、表54と表58に示したように、「シンナー遊び」の経験と大麻・覚せい剤乱用の経験とには、強い結びつきがあり、わが国では依然として有機溶剤が大麻・覚せい剤への「ゲイトウェイ・ドラッグ」となっている可能性が強く示唆される³⁾。

9. 「ゲイトウェイ・ドラッグ」としてのタバコとアルコール

中学生における喫煙及び飲酒が「シンナー遊び」への「ゲイトウェイ」になっている可能性が高いことは以前より指摘してきたが³⁾⁵⁾⁶⁾¹⁴⁾、表50及び表52の結果は、大人が同伴しない飲酒と「シンナー遊び」との結びつきの強さと、喫煙経験と「シンナー遊び」との結びつきの強さを再確認させるものである。この背景には、有機溶剤乱用同様に、家庭環境、「仲間」関係等、薬物乱用の背後にある人間関係が大きな要因となっていると推定できる。

中学生における喫煙・飲酒・薬物乱用防止を行う際には、喫煙・飲酒・薬物乱用といった表面的行為に目を奪われすぎることなく、その背後に潜む家庭環境、「仲間」関係等の人間関係に目を注ぐことが重要であろう¹⁶⁾。

E. 結論

わが国の中学生における薬物乱用の広がり把握し、特に有機溶剤乱用に関する危険因子を特定することによって、中学生に対する薬物乱用防止対策の基礎資料に供するために、飲酒、喫煙、有機溶剤・大麻・覚せい剤乱用に対する意識・実態調査を実施した。調査期間は、2002年10月中（一部11～12月中）であり、層別1段集落抽出法によ

り選ばれた全国210校の全生徒を対象に、自記式調査を実施した。その結果、149校（対象校の71.0%）より、62,900人（対象校210校の全生徒の57.7%）の回答を得た。有効回答数は62,813人（対象校210校の全生徒の57.6%）であった。

ただし、回答が得られなかった県が3県あり、都道府県毎の回答率には、未だにばらつきがあることをふまえた上で、本調査の結果を利用する必要がある。

このような限界はあるが、以下のような結論を得た。

① 男子では1.4%（1年生1.3%、2年生1.4%、3年生1.5%）、女子では1.0%（1年生1.0%、2年生1.1%、3年生1.0%）、全体では1.2%（1年生1.2%、2年生1.3%、3年生1.3%）の者が、これまでに有機溶剤乱用を経験したことがあると回答した。

この結果は、男女合わせた全体では、1996年に実施した第1回全国調査の結果よりは0.1%高い値であるが、1998年及び2000年調査よりは0.1%低い値であった。性別では、男子では1998年以降減少しているのに対して、女子では1996年以来増加傾向にあり、女子での今後が危惧される結果であった。

② 有機溶剤乱用の目撃率に関しては男性、女性、全体の全てにおいて、1996年以降、着実に低下しており（全体で11.8%から7.4%）、「身近に経験者がいる」と答えた者の率も、1998年のピークから着実に減少していた（全体で5.4%から3.7%）。また、有機溶剤乱用に「誘われた」ことのある者の率は男子では1996年以降の最低を示したが、女子では1996年以降ほとんど横這いであり、女子における「誘い」が危惧される結果であった。

③ 以上を総合すると、男女合わせた全体では、有機溶剤乱用の勢いは、弱くなってきていると考えられる。しかし、女子における乱用の拡大傾向が危惧される結果であった。

④ 有機溶剤乱用経験者群では、非経験者群に比べて、日常生活の規則性、学校生活、家庭生活、友人関係において、好ましくない傾向が統計学的有意差を持って強いことが再確認された。

⑤ その背景には、家庭生活のあり方が大きく影響していると考えられる。経験者群では、「親との相談頻度」「家族との夕食頻度」が有意に低く、逆に「大人不在での時間」が有意に長く、親子の

共有時間が少ない傾向がうかがわれた。

⑥ 結局、有機溶剤経験者群は、総体的に見れば、家庭にも、学校にもなじみず、友人関係も希薄な中学生たちが多く、「居場所のない子供たち」と推定することができよう。

⑦ また、中学生における喫煙と大人が同伴しない飲酒は、有機溶剤乱用と強い繋がりを持っており、これらは、有機溶剤乱用への「ゲイトウェイ」となっている可能性が再確認された。

⑧ これまでの一連の本調査では、往々にして、害知識は有機溶剤乱用経験者群の方が高いという傾向が認められていた。しかし、今回の調査では、急性中毒死、歯の腐食、多発神経炎に関する男子、精神病に関する男女では非経験者群の方で「知っている」を選んだ者が多く、それ以外の害知識でも、経験者群VS非経験者群で有意差が認められない項目が出てきた。これは、「害を知らない者が乱用しやすい」という仮説があるとすれば、「本来あるべき姿」であり、ここ数年の薬物乱用防止教育推進による成果の可能性がある。

しかし、「害を知らない者が乱用しやすい」とばかりは言えない面があるのが薬物乱用の世界であり、同時に、ほとんどの害知識の周知率が増加傾向にあるにも関わらず、急性中毒死の周知率は下降気味であり、そもそも精神病に関する周知率以外は、決して高い周知率とは言えない現状が明らかになった。薬物乱用防止教育の一層の推進が望まれる結果であった。

⑨ 大麻の生涯経験率は、男子で0.6%、女子で0.4%、全体で0.5%であり、覚せい剤の生涯経験率は、男子で0.5%、女子で0.4%、全体で0.4%であった。

これは大麻に関しては男女を問わない全体では2000年に比べて0.1%の上昇であり、覚せい剤に関しては、2000年と同じ結果であることを意味する。

性別では、男子では大麻でも覚せい剤でも生涯経験率は2000年と変化がなかったが、女子では両薬物に関して共に増加していた。

有機溶剤の場合と同様に、女子における大麻・覚せい剤乱用の今後が危惧される結果であった。

ただし、結果の数字自体が、無回答の者の割合よりも低く、積極的に論じることはできない限界はある。

⑩ 大麻及び覚せい剤乱用による医学的害知識の周知度は、増加傾向にあり歓迎されるが、そもそも周知度自体が高いとは言えず、薬物乱用防止

教育の一層の推進が望まれる結果であった。

⑪ 違法性薬物の入手可能性については、有機溶剤は日常生活上の必需品であり、その入手可能性への認識は高かった。大麻、覚せい剤の入手可能性は1998年以降、着実に増加していた。これらは、第3次覚せい剤乱用期を象徴するような結果（入手可能性の高さ）であった。しかも、ここでも女子における大麻・覚せい剤の入手可能性の増加が特徴的であり、今後が危惧される結果であった。

また、有機溶剤乱用非経験者群では「絶対不可能」を選択した者が大麻でも覚せい剤でも50%を超えていたが、有機溶剤乱用経験者群では、大麻でも覚せい剤でも男子で47~48%、女子で56%の者が入手可能を選択していた。わが国の中学生にとって、有機溶剤を乱用すると言うことは、大麻、覚せい剤が身近なものになるという特徴を示唆していた。

⑫ 薬物の乱用経験率には、法の遵守性が大きく影響すると考えられる。喫煙については非喫煙群全体の10.2%の者が「少々ならかまわない」を選んでいるのに対して、「シンナー遊び」に関しては、それを選んだ者は「シンナー遊び」非経験者群全体の3%に過ぎず、大麻では「シンナー遊び」非経験者全体の2%であったことは、同じ依存性薬物と言えども、有機溶剤及び大麻乱用への心理的垣根は喫煙よりはるかに高いことを物語っている。

⑬ また、有機溶剤乱用の経験と、大麻・覚せい剤乱用の経験とには、強い結びつきが認められ、同時に、喫煙経験と有機溶剤乱用経験との間にも強い結びつきが認められた。このことは、わが国の中学生では、喫煙→有機溶剤乱用→大麻・覚せい剤乱用という流れがあることを強く示唆する結果であった。

F. 研究発表

1. 論文発表

1) Kiyoshi Wada: Prevalence of Solvent Inhalation among Junior High School Students in Japan and Their Background Lifestyle: Results of Chiba Prefecture Survey 1994. Jpn.J.Alcohol & Drug Dependence 37(1): 41-56, 2002.

2) 和田 清、菊池安希子、尾崎米厚、勝野眞吾：青少年の薬物乱用—全国中学生帖佐の結果より—。日本アルコール関連問題学会雑誌 4: 47-51,

2. 学会発表

1) Kiyoshi Wada, Shigeru Ozaki, Kazuyhiro Nakayama, Hiraki Koishikawa, Masafumi Katayama, Shinji Hirai, Tatsuo Yabana: Structure of symptoms in volatile solvent-induced psychosis. College on Problems of Drug Dependence, 64th Annual Scientific Meeting, Quebec City, Canada, June 13, 2003.

2) Kiyoshi Wada, Shigeru Ozaki, Akiko Kikuchi: A Brief History and the Current Situation of Methamphetamine Abuse in Japan. Symposium (Addiction Psychiatry: Clinical Features of Methamphetamine Psychosis). XII World Congress of Psychiatry. Yokohama, Japan. 2002.8.26.

3) 和田 清、菊池安希子、尾崎 茂：社会精神に学的研究：疫学的調査研究の重要性。第14回日本アルコール精神医学会、シンポジウムII「依存症研究－最近の動向」。横浜市健康福祉総合センター。横浜。2002.8.31.

4) 和田 清、菊池安希子、尾崎 茂：全国の一般住民における薬物乱用状況(2001年)について。第37回日本アルコール・薬物医学会。東京。2002.9.6.

3. 国際会議

1) Kiyoshi Wada: Japan's Situation on Methamphetamine Abuse including HIV and HCV Infection. 1st National Conference on Substance Abuse. Organized by Committee of Consultants on Substance Abuse, Office of the Narcotic Control Board, Office of the Prime Minister, Thailand, 25-27-September, 2002.

謝辞

本調査研究にご協力いただいた多くの学校関係者および生徒、ならびに、本調査の実施に関して御尽力いただいた多くの方々に、心よりお礼を述べさせていただきます。

また、調査用紙回収後の困難な資料整理に協力していただいた、東京ダルク、日本ダルクの協力者に感謝いたします。

1) 尾崎 茂、和田 清：全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査。平成12年度厚生科学研究費補助金（医薬安全総合研究事業）研究報告書「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神障害者等に対する適切な医療のあり方についての研究」（主任研究者：和田 清）。pp.77-118. 2001.

2) 和田 清、福井 進：覚せい剤精神病の臨床症状－覚せい剤使用年数との関係－。アルコール研究と薬物依存 25:143-158, 1990.

3) 和田 清：“Gateway Drug”概念について。日本アルコール・薬物医学会雑誌 34(2)：95-106, 1999.

4) Wada, K., Fukui, S.: Demographic and Social Characteristics of Solvent Abuse Patients in Japan. The American Journal on Addictions 3:165-176, 1994.

5) Wada, K., Fukui, S.: Prevalence of volatile solvent inhalation among junior high school students in Japan and background life style of users. Addiction 88: 89-100, 1993.

6) Wada, K., Price, R.K., Fukui, S.: Cigarette smoking and solvent use among Japanese adolescents. Drug and Alcohol Dependence 46: 137-145, 1997.

7) Wada, K., Price, R.K., Fukui, S.: Reflecting Adult Drinking Culture: Prevalence of Alcohol Use and Drinking Situations among Japanese Junior High School Students in Japan. Journal of Studies on Alcohol 59: 381-386, 1998.

8) 和田 清：中学生における飲酒－飲酒文化の反映－。日本アルコール・薬物医学会雑誌 34: 36-48, 1999.

9) 和田 清：薬物乱用の現状と歴史。神経精神薬理 19: 913-923, 1997.

10) 和田 清、勝野真吾、尾崎米厚、中野良吾：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒に

- ついでに調査研究。平成8年度厚生科学研究費補助金（麻薬等対策総合研究事業）研究報告書「薬物依存・中毒者の疫学調査及び精神医療サービスに関する研究班」（主任研究者：寺元 弘）第1分冊薬物乱用・依存の多面的疫学調査研究（2）。pp.21-60. 1997.
- 11) 文部省大臣官房調査統計企画課：全国学校総覧2002年版。原書房。東京。2002.
- 12) Wada, K.: Prevalence of Solvent Inhalation among Junior High School Students in Japan and Their Background Lifestyle: Result of Chiba Prefecture Survey 1994. Japanese Journal of Alcohol Studies and Drug Dependence 37: 41-56, 2002.
- 13) 和田 清、中野良吾、尾崎米厚、勝野真吾：薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査。平成10年度厚生科学研究費補助金（医薬安全総合研究事業）研究報告書「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神障害者等に対する適切な医療のあり方についての研究」（主任研究者：和田 清）。pp.19-83. 1999.
- 14) 和田 清：中学生における有機溶剤乱用の実態とその生活背景—1992年千葉県調査より—。学校保健研究 43:26-38, 2001.
- 15) 和田 清：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究。平成5年度厚生科学研究費補助金「麻薬等総合対策研究事業」薬物依存の社会的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者：福井 進）平成5年度研究成果報告書。pp.27-54. 1994.
- 16) 和田 清：有機溶剤乱用発生の社会的背景—青少年にとり有機溶剤とは何か—。アルコール医療研究 8: 179-184, 1991.
- 17) 和田 清：中学生における飲酒—飲酒文化の反映—。日本アルコール・薬物医学会雑誌34: 36-48, 1999.
- 18) 和田 清：有機溶剤乱用と家族。精神保健研究 7: 13-17, 1994.
- 19) Wada, K.: Lifetime Prevalence of Alcohol Drinking, Cigarette Smoking, and Solvent Inhalation among Junior High School Students in Japan: Tradition and Urbanization. Japanese Journal of Alcohol Studies and Drug Dependence 36: 124-141, 2001.
- 20) 和田 清、菊池安希子、尾崎米厚、勝野真吾：薬物乱用に関する全国中学生意識・実態調査。平成12年度厚生科学研究費補助金（医薬安全総合研究事業）研究報告書「薬物乱用・依存等の疫学的研究及び中毒性精神障害者等に対する適切な医療のあり方についての研究」（主任研究者：和田 清）。pp.15-76. 2001.

分担研究者らによる一連の中学生調査に関する報告書、論文一覧

		報告書	論文
1990年	千葉県12校	福井 進、和田 清、伊豫雅臣：薬物乱用・依存の実態と動向に関する研究－中学生における「シンナー遊び」の実態とその背景－。（班長）佐藤光源．厚生省「精神・神経疾患研究委託費」2指-13．薬物依存の発生機序と臨床及び治療に関する研究．平成2年度研究成果報告書．pp. 27-34, 1991.	<p>Wada,K., Fukui, S.: Prevalence of volatile solvent inhalation among junior high school students in Japan and backgroundlife style of users. <i>Addiction</i> 88: 89-100, 1993.</p> <p>Wada,K., Fukui, S.: Prevalence of tobacco smoking among junior high school students in Japan and backgroundlife style of users. <i>Addiction</i> 89: 331-343, 1994.</p> <p>Wada, K., Price, RK, Fukui, S: Cigarette smoking and solvent use among Japanese adolescents. <i>Drug and Alcohol Dependence</i> 46:137-145, 1997.</p> <p>Wada, K., Price, RK, Fukui, S: Reflecting Adult Drinking Culture: Prevalence of AlcoholUse and Drinking Situations among Japanese Junior High School Students in Japan. <i>Journal of Studies on Alcohol</i> 59: 381-386, 1998.</p> <p>和田 清：中学生における飲酒－飲酒文化の反映－．<i>日本アルコール・薬物医学会雑誌</i> 34: 36-48, 1999.</p>
1992年	千葉県14校	和田 清：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査研究．平成4年度厚生科学研究（麻薬等対策総合研究事業）薬物依存の社会医学的、精神医学的特徴に関する研究（主任研究者：福井 進）平成4年度研究成果報告書．pp25-64, 1993. 3.	<p>Wada, K,: Lifetime Prevalence of Alcohol Drinking, Cigarette Smoking, and Solvent Inhalation among Junior High School Students in Japan: Tradition and Urbanization. <i>Japanese Journal of Alcohol Studies and Drug Dependence</i> 36: 124-141, 2001.</p> <p>和田 清：中学生における有機溶剤乱用の実態とその生活背景－1992年千葉県調査より－．<i>学校保健研究</i> 43 :26-38, 2001.</p>
1993年	関東地方14校	和田 清：中学生における「シンナー遊び」・喫煙・飲酒についての調査	Kikuchi, A., Wada, K.: Factors Associated with Volatile Solvent Use